

1. あなたがたは自分のために偶像を造ってはならない。  
また自分のために刻んだ像や石の柱を立ててはならない。  
あなたがたの地に石像を立てて、それを拜んではならない。  
わたしがあなたがたの神、主だからである。
2. あなたがたはわたしの安息日を守り、わたしの聖所を恐れなければならない。  
わたしは主である。
3. もし、あなたがたがわたしのおきてに従って歩み、わたしの命令を守り、それらを行なうなら、
4. わたしはその季節にしたがってあなたがたに雨を与え、地は産物を出し、畑の木々はその実を結び、
5. あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取り入れ時まで続き、ぶどうの取り入れ時は、種蒔きの時まで続く。  
あなたがたは満ち足りるまでパンを食べ、安らかにあなたがたの地に住む。
6. わたしはまたその地に平和を与える。  
あなたがたはだれにも悩まされずに寝る。  
わたしはまた悪い獣をその国から除く。  
剣があなたがたの国を通り過ぎることはない。
7. あなたがたは敵を追いかけ、彼らはあなたがたの前に剣によって倒れる。
8. あなたがたの五人は百人を追いかけ、  
あなたがたの百人は万人を追いかけ、あなたがたの敵はあなたがたの前に剣によって倒れる。
9. わたしは、あなたがたを顧み、  
多くの子どもを与え、あなたがたをふやし、  
あなたがたとのわたしの契約を確かなものにする。
10. あなたがたは長くたくわえられた古いものを食べ、新しいものを前にして、古いものを運び出す。
11. わたしはあなたがたの間にわたしの住まいを建てよう。  
わたしはあなたがたを忌みきらわない。
12. わたしはあなたがたの間を歩もう。  
わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。
13. わたしはあなたがたを、  
奴隷の身分から救い出すためにエジプトの地から連れ出したあなたがたの神、主である。  
わたしはあなたがたのくびきの横木を打ち砕き、あなたがたをまっすぐに立たせて歩かせた。
14. もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらの命令をすべて行なわないなら、
15. また、わたしのおきてを拒み、  
あなたがた自身がわたしの定めを忌みきらって、  
わたしの命令をすべて行なわず、  
わたしの契約を破るなら、
16. わたしもまた、あなたがたに次のことを行なおう。  
すなわち、わたしはあなたがたの上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病で目を衰えさせ、心をすり減らさせる。  
あなたがたは、種を蒔いてもむだになる。

あなたがたの敵がそれを食べる。

17. わたしは、あなたがたからわたしの顔をそむける。  
あなたがたは自分の敵に打ち負かされ、あなたがたを憎む者があなたがたを踏みつける。  
だれも追いかけて来ないのに、あなたがたは逃げる。
18. もし、これらのことの後でも、  
あなたがたがわたしに聞かないなら、わたしはさらに、あなたがたの罪に対して七倍も重く懲らしめる。
19. わたしはさらに、あなたがたの力を頼む高慢を打ち砕き、  
あなたがたの天を鉄のように、あなたがたの地を青銅のようにする。
20. あなたがたの力はむだに費やされる。  
あなたがたの地はその産物を出さず、地の木々もその実を結ばないであろう。
21. また、もしあなたがたが、わたしに反抗して歩み、わたしに聞こうとしないなら、  
わたしはさらにあなたがたの罪によって、七倍も激しくあなたがたを打ちたたく。
22. わたしはまた、あなたがたのうちに野の獣を放つ。  
それらはあなたがたから子を奪い、あなたがたの家畜を絶えさせ、あなたがたの人口を減らす。  
こうしてあなたがたの道は荒れ果てる。
23. もし、あなたがたがこれらのわたしの懲らしめを受け入れず、わたしに反抗して歩むなら、
24. わたしもまた、あなたがたに反抗して歩もう。  
わたしはまた、あなたがたの罪に対して七倍も重くあなたがたを打とう。
25. わたしはあなたがたの上に剣を臨ませ、契約の復讐を果たさせよう。  
またあなたがたが自分たちの町々に集まるとき、わたしは、あなたがたの間に疫病を送り込む。  
あなたがたは敵の手に落ちる。
26. わたしが、あなたがたのパンのための棒を折るとき、  
十人の女が一つのかまであなたがたのパンを焼き、はかりにかけて、あなたがたのパンを返す。  
あなたがたは食べても、満ち足りない。
27. これにもかかわらず、なおもあなたがたが、わたしに聞かず、わたしに反抗して歩むなら、
28. わたしは怒ってあなたがたに反抗して歩み、  
またわたしはあなたがたの罪に対して七倍も重くあなたがたを懲らしめよう。
29. あなたがたは自分たちの息子の肉を食べ、自分たちの娘の肉を食べる。
30. わたしはあなたがたの高き所をこぼち、  
香の台を切り倒し、偶像の死体の上に、あなたがたの死体を積み上げる。  
わたしはあなたがたを忌みきらう。
31. わたしはあなたがたの町々を廃墟とし、あなたがたの聖所を荒れ果てさせる。  
わたしはあなたがたのなだめのかおりもかがないであろう。
32. わたしはその地を荒れ果てさせ、そこに住むあなたがたの敵はそこで色を失う。
33. わたしはあなたがたを国々の間に散らし、剣を抜いてあなたがたのあとを追おう。  
あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町々は廃墟となる。

34. その地が荒れ果て、あなたがたが敵の国にいる間、そのとき、その地は休み、その安息の年を取り返す。
35. 地が荒れ果てている間中、地は、  
あなたがたがその住まいに住んでいたとき、安息の年に休まなかったその休みを取る。
36. あなたがたのうちで生き残る者にも、彼らが敵の国にいる間、彼らの心の中におくびょうを送り込む。  
吹き散らされる木の葉の音にさえ彼らは追い立てられ、  
剣からのがれる者のように逃げ、追いかける者もないのに倒れる。
37. 追いかける者もないのに、剣からのがれるように折り重なって、つまずき倒れる。  
あなたがたは敵の前に立つこともできない。
38. あなたがたは国々の間で滅び、あなたがたの敵の地はあなたがたを食い尽くす。
39. あなたがたのうちで生き残る者も、あなたがたの敵の地で自分の咎のために朽ち果てる。  
さらに、その先祖たちの咎のために朽ち果てる。
40. 彼らは、わたしに不実なことを行ない、わたしに反抗して歩んだ自分たちの咎と先祖たちの咎を告白するが、
41. しかし、わたしが彼らに反抗して歩み、彼らを敵の国へ送り込んだのである。  
もし彼らが、不実なことを行い、わたしに反抗して歩んだ自分たちの咎と先祖たちの咎を告白するならば、  
たとえわたしが彼らに反抗して歩み、彼らを敵の国に連れ去ったとしても、  
そのとき、彼らの無割礼の心はへりくだり、彼らの咎の償いをしよう。  
もし彼らの無割礼の心がへりくだり、罪の罰を心から受け入れるならば、受け入れる。
42. わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こそう。  
またイサクとのわたしの契約を、またアブラハムとのわたしの契約をも思い起こそう。  
そしてわたしはその地をも思い起こそう。
43. その地は彼らが去って荒れ果てている間、  
安息の年を取り返すために彼らによって捨てられなければならない、  
彼らは自分たちの咎の償いをしなければならない。  
実に彼らがわたしの定めを退け、彼らがわたしのおきてを忌みきらったからである。
44. それにもかかわらず、彼らがその敵の国にいるときに、  
わたしは彼らを退けず、忌みきらって彼らを絶ち滅ぼさず、彼らとのわたしの契約を破ることはない。  
わたしは彼らの神、主である。
45. わたしは彼らのために、彼らの先祖たちとの契約を思い起こそう。  
わたしは彼らを、異邦の民の目の前で、彼らの神となるために、エジプトの地から連れ出した。  
わたしは主である。」
46. 以上は、  
主がシナイ山でモーセを通して御自身とイスラエル人との間に立てられたおきてと定めとおしえである。

## 説教

レビ記 26 章は祝福と呪いについての教会で、極めて重要です。

まず 1 節と 2 節で最も重要なこととして、偶像崇拜の禁止と安息日の厳守を教えます。「わたしの聖所を恐れな

なければならない。」まことの神さまだけを神とし、安息日に一切の労働を休んで神さまの教えに耳を傾けることは、私たちの信仰生活の基本であり、土台であり、中心というべきものです。

3節から13節までは、神さまの戒めに従って生きるとどのような祝福が与えられるかが教えられます。私たちが神さまの戒めに従って生きる時には、神さまが私たちの間に住んでくださいます。私たちと共に歩んでくださいます。私たちを助けてくださいます。それで「安らかに」生活することができます(5)。具体的には、恵みの雨で地が潤うので、豊作となって満ち足りるまでパンを食べ、戦争に悩まされることなく、人口も増え、しかもどんなに人口が増えても、それを養って余りある食糧で常に満たされて、誰にも何にも悩まされずに「平和」に眠ることができるのです。

これに対し、神さまの戒めに聞き従わなければどうなるかが14節から39節まで教えられます。ここでは「もし、神さまの戒めに聞き従わないなら」という表現が14、18、21、23、27節で繰り返され、加えて「七倍も重く懲らしめる(打ち叩く、打つ)」(18,21,24,28)とまで言われて、神さまの戒めに聞き従わぬ場合には、五段階の「懲らしめ」が波状攻撃的に次々と襲いかかることが教えられます。「あなたがたの罪に対して七倍も重く懲らしめる」(18)と訳されている表現は、より厳密には「あなたがたの罪に対して七倍(七回)懲らしめることを増し加える(繰り返す)」となります。「七」は完全数です。つまり、一度のみならず、繰り返して、要するに悔い改めるまで、徹底的に、懲らしめるという意味になります。

まず最初の「懲らしめ」は、神さまが私たちに向かって顔を向ける(17節直訳)ことで、私たちに「恐怖(突然の恐怖、破滅、狼狽という意味)」が臨む、ということです。具体的には、「肺病と熱病で目を衰えさせ、心をすり減らさせる」と言います。種をまいても不毛となり、敵に打ち負かされて徒労と屈辱を味わいます。それでも神さまに聞き従わない場合には、第二段階の「懲らしめ」によって一層の不毛を味わわれます。「天を鉄のように」と言われます。恵みの雨が降らず天が閉ざされるため、「地はその産物を出さず、地の木々もその実を結ばないであろう」というのです。神さまに聞き従う時には、天から恵みの雨が豊かに降って豊作となるのとまるで正反対です。そして、このような酷い不毛さを通して、神さまは「あなたがたの力を頼む高慢さを打ち砕」かれるのでした。それでも神さまに聞き従わない場合には、第三段階の「懲らしめ」として、「野の獣」が解き放たれて、「あなたがたから子を奪い、あなたがたの家畜を絶えさせ、あなたがたの人口を減らす」と教えられます。それでもなおかつ神さまに聞き従わない場合には、第四段階の「懲らしめ」として、「剣を臨ませ、契約の復讐を果たさせよう」と言われます。「疫病」が送り込まれ、「敵の手に落ち」、普段の十分の一の量のパンしか食べることのできない、「食べても、満ち足りない」飢餓状態に陥られます。そして、「これにもかかわらず、なおもあなたがたが、わたしに聞き従わず、わたしに反抗して歩むなら」、最後の第五段階の「懲らしめ」として、これ以上ない最悪の飢餓状態が反抗者に襲いかかります。すなわち、それは、あまりの空腹と飢餓状態のために常軌を逸した食人行為、「あなたがたは自分たちの息子の肉を食べ、自分たちの娘の肉を食べる」という、まるで生き地獄というべき極限の飢餓状態であります。戦争により町は廃墟と化し、人々が偶像崇拜をしていた礼拝所も神殿も破壊され、倒された「偶像の死体の上に、あなたがたの死体を積み上げる」と言われたそのあまりに凄惨な有様を見て、町を破壊した当の敵でさえも「色を失う」と言います。かたや、飢餓も戦禍も免れてどうにか生き残った者たちは、捕囚となって異国の地に連れて行かれ、敵に食いものにされながら「自分の咎のために朽ち果てる」と言われます。かろうじて敵地で生き延びる間も、神さまは「彼らの心の中に臆病を送り込む」と言われ、敵による恐怖に常に怯えながら生きるしかないというのでした。そして、これは後に現実となります。アラムとの戦争の際に(Ⅱ列王6:28-29)、あるいはエルサレムが紀元前586年バビロンによって滅ぼされる時、そして、紀元70年ローマ軍によって滅ぼされる時にも、包囲された城壁の中で飢餓となった母親が自分の子どもを食べて生き延びようとした(エリヤ19:9;エ'

キル5:10)。そして、バビロン捕囚となり、或いは、長い間、亡国の民としてユダヤ人は世界中に離散させられました。

40 節以降は不従順の故に神さまの「懲らしめ」を受けた後どうなるかということが預言(約束)されています。これまで見てきた五段階の徹底した「懲らしめ」の波状攻撃により、遂にイスラエルは神さまに反抗して歩んできた自分たちと先祖たちの罪とを告白し、その高慢な「無割礼の心」は「へりくだる」ようになります。そうして後、神さまは彼らを受け入れてくださる(或いは「咎を償う」とお約束くださるのでした(40-41)。

「懲らしめる」と訳される言葉は、「懲らしめる、訓練する、忠告する、責める、恥をかかせる」といった意味です。つまり、神さまがご自身のために災いを下されるのは、ひとえにご自身の民を厳しく「訓練する」ためであるというのです。単に「滅ぼす」ために災いを下されるものではありません。そうではなく、「訓練する」ためです。神さまに従って生きて「平和」な人生を生きるよう訓練するために、恐怖を、不毛を、戦禍を、そして飢餓とどん底を経験させるのです。

それ故、災いは「契約の復讐」と言われます(25)。

#### 25. わたしはあなたがたの上に剣を臨ませ、契約の復讐を果たさせよう。

つまり、災いも「契約」から出ているのです。それは、ただ単に「こう生きなさい」と戒めを与えて終わりというのではなく、「こう生きなさい」と命じた戒めをきちんと生きることができるよう訓練する「契約の鞭」です。神さまから離れて生きる者を「打ち」、「打ち叩き」、「懲らしめ」、一度懲らしめてもダメなら、二度でも、三度でも、四度でも、五度でも、七度でも、徹底的に打ち叩き、「懲らしめ」て、ご自身のもとに連れ戻し、そうやって、神さまと共に生き、神さまと共に歩んで「平和」に生きさせるための言わば「いのちの鞭」なのです。

42 節、45 節を見ると、神さまはご自身の「思い起こそう」と頻りに言われます。

#### 42. わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こそう。

またイサクとのわたしの契約を、またアブラハムとのわたしの契約をも思い起こそう。

そしてわたしはその地をも思い起こそう。

#### 45. わたしは彼らのために、彼らの先祖たちとの契約を思い起こそう。

これは戒めに従う者の所では言われなかったことです。神さまの戒めに従っている人は、初めから神さまの戒めを思い出してはそれに従っているのです。そう言う必要が無かったのでしょう。でも、神さまの戒めに逆らって生きている者に対しては、43 節にあるように、彼らが神さまの戒めを退け、神さまの戒めを忌み嫌って生きているので、神さまは、彼らが神さまとの契約を忘れて見て見ぬふりしながら戒めに背いて生きているのに対して、神さまご自身はそうしない、かえって、たとえ彼らが神さまとの契約を思い起こさなくても、神さまは「思い出そう」と言われるのです。しかも、「アブラハム」「イサク」「ヤコブ」といった先祖との契約です。つまり、今生きている彼らが完全に神さまに背いて歩んでいるので、彼らの前の先祖との契約を「思い出す」と言われます。それは、彼らが生まれる前の契約です。彼らが生まれる前から既に結ばれていた契約です。「わたしはあなたの神となり、あなたの子孫の神となる」これがアブラハム、イサク、ヤコブと神さまが結ばれた契約です。

その契約を思い出して、その契約に基づいて、「契約の復讐」を、「懲らしめ」を与えて、彼らを悔い改めさせ、そうして彼らを祝福すると言われるのです。恐るべき恵みです。誰も逆らうことのできない恵みです。不可抗力の恵みです。絶対的な恵みです。その御手に捕らえられて、絶対に逃れられない、永遠の「選び」の恵みです。

神さまは、ご自身の戒めに従う者にこう言われます。

#### 12. わたしはあなたがたの間にわたしの住まいを建てよう。

わたしはあなたがたを忌みきらわない。

わたしはあなたがたの間を歩もう。

わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。

13. わたしはあなたがたを、

奴隷の身分から救い出すためにエジプトの地から連れ出したあなたがたの神、主である。

わたしはあなたがたのくびきの横木を打ち砕き、あなたがたをまっすぐに立たせて歩かせた。

そして、神さまに逆らう者たちにも、「彼らがわたしの定めを退け、彼らがわたしのおきてを忌みきらっている」にもかかわらず、それでも「わたしは彼らを退けず、忌みきらって彼らを絶ち滅ぼさず、彼らとのわたしの契約を破ることはない」と言いながら、こう言われるのです。

44 わたしは彼らの神、主である。

45. わたしは彼らを、異邦の民の目の前で、彼らの神となるために、エジプトの地から連れ出した。

わたしは主である。」

これは全く同じです。つまり、神さまは、ご自身に従う者たちの神、主である(となる)と同時に、神さまは、ご自身に逆らう者たち(主の民)の神、主である(となる)と言われるのです。

神さまに愛され、永遠の昔より選ばれ、救われ、生かされ、神さまのものとされている兄弟姉妹おひとりおひとりが、罪を悔い改め、神さまのみことばに聞き従って、神さまの平和にあずかり、神の栄光をあらわす生涯を生きていかれるよう、主の御名により祈ります。